

観賞樹苗の簡易鉢栽培試験

(2) 鉢容量と生育限界について

三 善 重 信

(福岡県立農業試験場)

MIYOSHI, S.

Study on the Method of the Simple Pot Culture to the
Nursery Stock of Ornamental Tree

(2) Effect of the Pot Capacity on the Growth

限られた特定の用土で、苗木の鉢栽培がどの程度できるか、樹種別生育量、生育障害、栽培限界等について、長期簡易鉢栽培上の問題を昭和48年から49年にわたって検討した。

試験方法

供試樹種：カイヅカイブキ、シャリンバイ、サツキ、ネズミモチ、イチョウの2年生苗、昭和48年4月鉢上げ定植。鉢の種類と容量：ポリエチレン鉢、1ℓ、2ℓ、3ℓ、素焼鉢、1ℓ、2ℓ使用。鉢用土：畑土（火山灰壤土）単用と、畑土（7割）ピートモス（3割）容量比混合。かん水法：Bノズルかん水、マーキュリー（細管）かん水、湛水ベットかん水。区制面積：1区10株、3区制。施肥：緩効性固形肥料（kg/a）N2.5、P₂O₅ 2.5、K₂O 2.5、4月、7月に分施。かん水量：（mm/1日）春秋期5、夏期10を原則とし、降雨が計雨量を上回る場合かん水中止。

試験結果と考察

1. 鉢容量が小さい程、苗木の生育は一般に劣った。鉢の種類は素焼鉢が、ポリエチレン鉢に勝る生育率であった。しかし、畑土単用の3ℓポリエチレン鉢は、各樹種にわたり生育率が悪く、容量の大きいポリエチレン鉢では、ピートモスの混用が必要であると思われた。
2. 鉢用土は初年度の場合、ピートモス混用が、畑土単用に勝ったが、第2年度は両区の生育率が接近し、ピートモス混用の効果は次第に消失しているものと考えられた。
3. カイヅカイブキ、シャリンバイ、ネズミモチ、イチョウは鉢栽培期間が長くなる程、露地区との生長量差が大きくなったが、サツキの生育率は、鉢栽培が露地区に勝り、着蕾数や小枝の充実も良好であった。

以上、限られた用土による簡易鉢栽培では、鉢容量が

小さい程、苗木の栽培が不安定であり、正常な生育を促すには徹底した集約管理が必要であった。しかし、いかに徹底した管理を施しても、枝葉の発達に伴う根圏の発達がない限り正常な生育はなく、限られた用土では苗木の正常な生育に限界があるものと思われた。なお、生育限界は樹種によって異なり、イチョウは年間生長量が大きく（3年で1.5～2mの幹長に達する）、根の状態が粗であるため、鉢栽培の生育率は最も劣った。すなわち、イチョウは供試した樹種中最も鉢栽培が困難な樹種であった。ネズミモチ、カイヅカイブキ等もこれに次ぎ、これらの樹種は長期間の鉢栽培には不向きである。しかし、サツキの場合、2ℓ鉢以上では露地区に比べ、鉢栽培の生育が勝り、1～2年程度の連続的鉢栽培においても、着蕾数や、枝葉の充実がよいため、鉢栽培の適性があるものと思われた。

第1表 長期鉢栽培における生長量比較

項目		イ チ ョ ウ		サ ツ キ	
鉢の種類と容量	鉢用土	生長率	標準比	生長率	標準比
露地標準		844%	100%	257%	100%
1ℓポリ鉢	単	248	29	176	68
	混	260	30	222	86
1ℓ素焼鉢	単	322	38	225	88
	混	342	41	265	103
2ℓポリ鉢	単	302	36	210	82
	混	346	41	270	105
2ℓ素焼鉢	単	477	57	338	132
	混	487	58	364	142
3ℓポリ鉢	単	228	27	298	116
	混	346	41	265	103

注) 鉢用土、単は畑土単用、混は畑土+ピート